

氏名	岩谷 駿
ヨミガナ	イワヤ シュン
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第470号
学位授与年月日	平成27年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 差異から発現する身体 〈作品〉 みんな死にたいんだから、死にたいなんて言うな Nunc, et in hora mortis nostrae, in hora mortis nostrae 隙間のnm asile 海の色、山の音、人の鼓動

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	齋藤 典彦
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	佐藤 道信
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	植田 一穂
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	関 出

（論文内容の要旨）

すべてが平均値という虚像に映し込まれきった時代に、私はいる。

生まれた時から、死ぬまで、さらには死んだ後も、徹底した生活の模範化と肉体の平均化のなかにあり、個性は意識のなかに押し込まれた。「リンゴ」という言葉によってリンゴひとつひとつの差異はすべて無視された。言葉は世界を平均化し、分断する。言葉という意識のなかで世界は明確化されるが、それは曖昧さを許容できなくなることでもある。

しかし我々は本来、ヒトという身体をもつ動物であり、我々の個性、一人一人の差異は、意識よりも肉体における比重が大きいと考えられる。それが見えにくくなっているのは、肉体が常に自覚しづらく、不可解な深遠さをもっているからであろう。

ジル・ドゥルーズの言葉が、それを表出している。

「このつつましい、無一文で、病にも触まれていた生が、この華奢でひ弱な体が、この輝く黒い服をした卵形の浅黒い顔が、どうしてこれほど大いなる生の活気に満ち、生そのものの力を体現している印象を与えるのだろうか。」

（ジル・ドゥルーズ『スピノザ 実践の哲学』より）

本論では、身体を「肉体」と「意識」とに分解し、その上で、脳化され意識から欠落した肉体を拾い直し、我々が持つ肉体に対する認識における共通点と差異を考察する。

そして、ドゥルーズのいう「生そのものの力」とは何か、それを作品に落とし込むためには何が必要かをテーマにする。このような肉体における共通点と差異を表現することで、平均化されカテゴリーにはめ込まれた現代社会における「生」のもつ可能性を再考することに繋がるのではないかと考えている。

第1章ではまず「肉体」と「意識」を二つの違う概念として扱い、現代の我々が置かれた世界で、肉体がどのような立ち位置にあるかという話から導入する。特に「人工と自然」「肉体と意識」「自己と他者」、このような対立項を軸に肉体とそれを取り巻く世界を二元論的に眺める。そして、それぞれの対立項が隔離や監視、摩擦、そして孤独といった事象を生み出していることを述べる。それらはすべて肉体と意識の隔たりという

「間」もしくは「境界」という領域から発生している。肉体と意識が互いに影響しあって作られたものが自分自身、つまり「身体」であるという本論の仮定から、果たして身体が内包している「間」という境界とは何なのかという問題が浮かび上がる。

実は境界とは差異を生むための架空の場であり、場は常にゆらぎ、浮沈し、流転する、反復の状態にあるという流れが第2章となる。ゆらぎ状態にある「境界」が、絵画と結びついた時に、どのような効果をもたらすか、絵画としての境界、描かれた物の境界、観る者との境界という具体的な表現についての考えを述べる。とりわけ「線」と「余白」というテーマの重要性が、この章での焦点となる。

第3章は、自身の絵画作品を解説しながら、我々の身体が「境界」としての現象を持ち、「肉体」と「意識」が渾然となった場であり、そこから何を発現しているのかを考察する。人間の身体が、自然と人為の両面を持つことを、本論の「肉体」と「意識」の一つの結論としつつ、表現における「身体を持つ影響力」＝「身体の聲」を多角的に述べる。そして作者の「身体の聲」と鑑賞者の「身体の聲」をリンクさせるために、現代におけるリアリティある身体とは何かという問題提起をしつつ、絵画における身体表現の可能性を探る。

最終的に身体は、自然と人為の要素が、お互いに影響を及ぼし合い、「肉体」を形成し「意識」を形成している場であることが見えてくる。そして、家具を組み立てる際にあえて「遊び」という隙間を内包させるように、自己と他人、内と外、個人と社会といった場であることは、それぞれの関係を両立するために、差異（＝間）が重要な作用を及ぼすのではないだろうか。差異があることで、自己と他者を時には突き放し、時には結びつけることが可能である。差異から発現する身体とはこのことである。

身体感覚に耳を傾けたとき、そこには各々が身体に宿した鼓動やリズムが存在している。お互いのズレ、差異を感じる時、人の鼓動は大きくゆらぎ、普段は意識しない身体感覚に耳を傾ける。「身体の聲」はこういふ時こそ発現するのである。

「リンゴ」が絵画に描かれたとき、人は「リンゴ」という概念を見るのではなく、画家の「身体の聲」が「リンゴ」に描き込まれているのを見る。「身体の聲」を絵画という、特殊な表現に落とし込まれた時、作者と鑑賞者を結びつけるフラジャイルでビビットな関係性が生まれるのではないだろうかと考えている。

（論文審査結果の要旨）

筆者は第1章の冒頭で、人間が個々に意識と肉体として抱える孤独、しかしその共通性ゆえに、共感を生む詩が存在するのだという萩原朔太郎の言を引いている。これが、その共振を絵画で発現させようとする筆者の試みと本論文の主旨を、ほぼそのまま代弁している感がある。論文タイトルの「差異」とは孤独な個々、「身体」は肉体と意識の統合体を意味し、その境界や間^{はざま}をゆらがせることで共振を「発現」させようとする試みを論じたのが、本論文である。少し注意を要するのは、本論文でのゆらぎや共振の発現が、自己と他者のコミュニケーション論としてより（最終的に期待するのはそこだが）、むしろ個々の身体じたいが内包する意識と肉体の乖離を、その境界や間^{はざま}をゆらがせることでつなごうとする試みの方を、重点的に論じていることである。その論理設定はやや複雑だ。

筆者は、自己と他者の「差異こそが、孤独を生み、他者とのコミュニケーションを生み、そして芸術を生んだのだ」と考えている。ただ、ひとつの生命としては本来渾然一体となっていたはずの肉体と意識は、脳化社会によって意識が優位に立つようになり、情報社会化した現代では、意識がフラット化しつつも肉体に対して圧倒的に優位になっているとする。つまり、意識（社会）が肉体（自然）を乖離的に支配しているということである。したがって筆者の試みとは、肉体と意識を渾然一体の状態（身体）に回復し、そこから発せられる「身体の聲」を、他者（鑑賞者）とリンクさせようとする試みといえる。本論文では、まず第1章で、自己と他者、肉体と意識、人為と自然の関係を考察し、意識が肉体に優先している状況を確認する。筆者によれば、生々しい肉体ではなく理想の肉体をつくり出したギリシャ彫刻も、美という“意識”が生み出した肉体だという。第2章では、自己と他者の差異や境界こそが、摩擦や孤独と同時に、コミュニケーションとしての芸術を生むこと、したがってそこでの方法は、境界をゆらがせ、曖昧化し、あるいは余白の領域をつくり出すことだとして、第3章でその具体的な試みを自作と提出作品で解説する。

筆者がこうした肉体と意識の乖離をテーマとするようになったのは、失声症と産土うぶすなの感覚の欠落という二つの理由によるらしい。高校生の時に経験した失声症は、頭の中（意識）にうぶすなまぐ言葉が、声（肉体）にならない状態。産土の感覚の欠落は、父の転勤で各地を転々とした筆者に、肉体の感覚を記憶として保管する故郷という場がなかったということである。

本論文は、肉体と意識の両面を、現代の社会と個人との関係を視野に考察し、肉体・意識の乖離の緩和、それによる身体の回復、そして表現という「身体の聲」による他者との共振をめざした、リアリティの高い論考になっている。論文作成の進行に難渋したが、学位論文にふさわしい内容として審査会の評価と承認を得た。

（作品審査結果の要旨）

申請者は高校生の頃、失声症という声が出なくなる病気になった経験を持つ。軽度ではあったものの、自分は普通ではないというレッテルを貼られたように感じたという。このようなことがきっかけとなり、現代社会が「徹底した生活の規範化と身体の平均化のなかにあり、個性は型のなかに押し込まれている」と感じるようになる。「肉体」と「意識」がお互い影響しあって作られたものを「身体」と仮定し、「意識」がマクロな視点で「肉体」を捉えている状態こそが最もバランスのとれた「身体」だと申請者は考えている。そして、「肉体」と「意識」の間に生じる差異としての「身体の聲」に意識的であることが重要だと述べる。本論文は、こうした脳化されていると感じる現代社会に違和を覚えた申請者が、生物としてのヒトの持つ「肉体」を、意味付けされたカテゴリーから解放していくにはどうすればいいかを考察していくものである。そして作者の「身体の聲」と鑑賞者の「身体の聲」をリンクさせるために、現代におけるリアリティのある身体とは何かという問題を提起しつつ、絵画が「身体の聲」を通して、「意識」をマクロに広げていく表現になり得る可能性を探っていく。

提出作品「みんな死にたいんだから、死にたいなんて言うな」を含めた3作品とも、随所に鑑賞者の「身体の聲」の発現を促す仕掛けが施されている。中性的な人物表現、余白としての紙の地を生かした画面構成、墨流し技法の使用、そして、人の肌をあえて粒子の粗い岩絵の具で描写するなど、鑑賞者の感覚を刺激させ、呼び起こすための様々な表現方法を試みる。また、展示方法においても、横長の画面を湾曲的に配置するなど、展示空間全体で鑑賞者の感覚に訴えかける工夫もされる。鑑賞者と無言のうちに対話を生みたいという、申請者が作品に込めた思いを感じ取ることができる。技術と思索に裏打ちされた、高いレベルの作品であると評価するとともに、今後の展開にも期待したい。

審査会においては、審査員全員が申請者の一連の作品を学位に十分であると評価、判断し合格とした。

（総合審査結果の要旨）

申請者は論文において「肉体」が「意識」によりマクロな視点から捉えられている状態を「身体」、それらの間に生じる差異を「身体の聲」とし、現代を、言葉によりすべてのものが意味づけられた均一な情報化社会であると捉える。そして、ヒトという生物のそれぞれの「肉体」がもつ差異さえも言葉＝「意識」により意味づけされるなかで、切り捨てられ、カテゴリー化される脳化社会でもあると養老孟司の論を引きつつ論考する。さらに、さまざまな詩人や文学者の言説を例に、「肉体」と「意識」の間に生じるこの差異としての「身体の聲」に意識的であることが重要であると述べる。同時に、均一化が加速し、境界としての「身体の聲」が忘れられる現代の風潮に疑問を呈しつつ、「身体の聲」の表象としての絵画表現において、作者と観者を結びつけ「意識」をマクロに広げ得る可能性とはどういったものかを探ろうとする。

そもそも申請者が、現代が言葉により規定された脳化社会であると感じるようになった原因のひとつには、高校時代に失声症にかかったことがあるという。失声症とは、自分で何か言おうとしても、次から次に言葉が頭の中で浮かんでは消え、最終的にまともならず、声に出せない状態である。この経験が申請者の「肉体」「意識」「身体（の聲）」という三者の関係に対する考察の基本にあり、奥行きのある実感のともなった論考となっている。

提出作品を含めた申請者の作品においては、このような「身体の声」が切り捨てられることへの危機感と、いわゆる絵画＝視覚というカテゴリーからはみ出したテクスチャーへの偏愛とが結びついた手法、素材や作品形態が多用される。例えば、紙の地肌を多く残した画面構成、墨流し（マーブリング）の技法の使用、岩絵具の粒子の粗密を意識した描写など、申請者独自ともいえる日本画素材や表現への解釈と使用があげられる。また、エゴン・シーレからの影響を感じさせるが、トルソ的に人体の一部を明示しない描写方法、中性的な人物表現なども付け加えられよう。また、これらの表現上の手法は、屏風や巻物など四角い絵画平面ではない作品形態や空間を構成し提示する方法とあいまって、観者の感覚に全体的に訴えかけるものとして提示される。このように作品において申請者は、観者の「身体の声」に呼びかける全感覚的絵画表現と展示方法により、作者と観者の「身体の声」との交流を図ろうとしているように思われる。

以上のように、論文、作品ともに申請者の表現への思いは強い。それゆえ思いのなかにはうまく絵画化・言葉化、特に論述とそぐわない部分も多く、結果として物足りない部分も散見する。しかし、思いが強い分だけに、それらのもつ全体的な説得力は強い。そのような点から審査会において、審査員全員が学位に十分であると評価、判断し、合格とした。